

## 岩手医科大学歯学会第11回例会抄録

日時：昭和56年2月21日（土）午後1時

会場：岩手医科大学歯学部講堂

## 演題1 口腔一上顎洞穿孔症例の臨床的観察

○中込 和雄, 大坂 博伸, 岡村 悟  
小原 敏宏, 沼口 隆二, 伊藤 信明  
工藤 啓吾, 藤岡 幸雄

## 岩手医科大学歯学部口腔外科学第一講座

我々は、口腔一上顎洞穿孔の実体を把握する目的で、他医療機関で穿孔を生じて当科を受診した最近5年間の25症例について臨床的観察を行い、若干の知見を得たので報告した。

本症が当科の外来新患総数に占める割合は0.31%で、年代的には20歳代と50歳代に多かった。主訴は鼻腔への漏水や空気の漏れが16例と圧倒的に多く、穿孔の原因は第一大臼歯の抜歯がほとんどであった。また、穿孔部の粘膜欠損の形態は大むね類円形で、最小2×2mm、最大18×9mmで、その縦径×横径より得られる面積の平均は46.9mm<sup>2</sup>であった。穿孔から来院までの期間は10日以内が14例と過半数を占めていた。しかし、最短例では穿孔の当日、最長例では1年とかなりの巾がみられ、これには前医の紹介の有無が大きく関与していた。さらに長期（20日以上）のもの5例には、穿孔に起因する上顎洞炎の続発が認められ、その膿汁からは主に streptococcus α が分離同定された。さらに穿孔から来院までの間に、何らかの処置を受けたものは16例で、その処置内容は抗生剤・消炎剤の投与や抜歯窩再搔爬などであった。

当科における処置としては、1)閉鎖手術を施行したものが21例(上顎洞炎根治手術を併用したものも含む)、2)抜歯窩再搔爬後酸化セルローズを挿入したものが2例、3)感染予防ならびに上顎洞や口腔内洗浄を行ったものが2例であった。閉鎖手術としては、頬側弁閉鎖法(特に、Rehrmann法)が多用されていた。

質 問：佐藤 方信(口病理)

今回集計された症例で穿孔の、原因を歯科医の技術

的なもの、あるいは歯牙の解剖学的形態などの観点からみた場合いかがでしょうか。

回 答：伊藤 信明(口外1)

今回は、他医療機関で穿孔され、当科に来院した症例に限定したので、生じるべくして穿孔したのか、あるいは術者側の未熟ゆえに穿孔したのかを追跡調査は出来なかった。

質 問：大屋 高德(口外1)

1. 術後の癍痕の程度はいかがか。
2. 補綴処置時、問題はなかったか。

回 答：中込 和雄(口外1)

1. 症例にもよるが、術後の癍痕は、1カ月程で、ほとんど目立たなくなりました。
2. 頬側弁は、非常に伸展性に富むため、減張切開を十分に加えれば、前庭部の浅化などはほとんど見られなかった。したがって補綴処置などは、とくに支障はないものと考える。

## 演題2 盛岡市における1歳半児歯科検診の実態 第2報(2歳0カ月までの変化)

○山田 聖弥, 松井 由美子, 守口 修  
野坂 久美子, 甘利 英一

## 岩手医科大学歯学部小児歯科学講座

盛岡市在住の1歳6カ月(1.6歳)児696名を対象として歯科健康診査(健診)を行ない、その概況について、第9回岩手歯学会例会で、すでに報告した。その後、同一人を対象として3カ月毎の定期診査(定診)を行なっているが、今回は、2歳0カ月までの歯列および、う蝕罹患状態の変化について報告した。定診における受診率は、第1回定診(1.9歳)で403名(57.9%)と約半数であったが、第2回定診(2.0歳)でも370名(53.2%)で定診が定着されて来た。いままで計3回を連続受診した者は325名(46.7%)で、今回は、この連続受診者の健診結果を中心に検討を加えた。